

# 冒襄『影梅庵憶語』 訳注 (一)

大木 康

はじめに

『影梅庵憶語』は、明末清初の文人冒襄（一六一一—一六九三）が、夭折した側室董小宛を偲び、ともに過ごした日々  
の思い出を縷々書き綴った文章である。全編を通して描かれる董小宛のいじらしい姿には心うたれるが、それはまた  
過ぎ去りしことであるがゆえになおさら美しいのだともいえる。

董小宛はもと南京秦淮の妓女であった。如臯の名家に生まれた冒襄と出会い、さまざまな曲折を経た後に落籍され、  
冒襄の側室となる。『影梅庵憶語』は妓館をめぐる文化、文人たちの交遊、文人の家庭における日常生活、明末清初の  
混乱の状況、そしてまた当時の文人の女性観などをうかがう上でも一級の資料である。

まずはこれから三回ほどに分け、注を加えながら、その全文を日本語に翻訳する。訳注に続いて研究論考、関連資

料等に及ぶこととしたい。

訳出にあたっては、道光二十九年（一八四九）呉江沈氏世楷堂刊『昭代叢書』別集所収本を底本とした。現存する『影梅庵憶語』のほぼすべてのテキストが、楊復吉が『昭代叢書』（統輯）のために準備し、「癸巳秋日震沢楊復吉識」（癸巳は乾隆三十八年、一七七三）と題した識語を付したテキストに出るからである。その他以下に記す各種のテキストを用いて校訂し、本文を定めた。目睹しえたテキストは次の通りである。

『影梅庵伝奇』付録本 道光六年茗雪山房刊本（ただし節録である）

『賜硯堂叢書新編』丁集所収本 道光十年長洲顧氏刊本

『昭代叢書』別集所収本 道光二十九年呉江沈氏世楷堂刊本

『如臯冒氏叢書』所収本 如臯冒氏刊本（『影梅庵憶語』は民国九年刊）

『拝駕楼校刻四種』所収本 光緒二十六年番禺沈氏刊本

『香艷小品』所収本 宣統元年番禺沈氏石印本

『説庫』所収本 民国四年上海文明書局石印本

『香艷叢書』第三集所収本 宣統中、国学扶輪社排印本

『美化文学名著叢刊』所収本 趙君狂考 朱劍芒校 一九三六年国学整理社排印本

『紅袖添香室叢書』第一集所収本 一九三六年上海群学社排印本

『影梅庵憶語 浮生六記 香畹楼憶語 秋灯瑣憶』所収本 李之亮校点 一九九一年岳麓書社排印本

『閨中憶語五種』所収本 涂元濟注釈 一九九三年中国広播電視出版社排印本

『閑書四種』所収本 宋凝訳注 一九九五年湖北辞書出版社排印本

また『影梅庵憶語』には、潘子延による全文の英訳、

*The Reminiscences of Tung Hsiao-wan, translated by Pan Tze-yen, The Commercial Press, Limited, Shanghai, 1931.*

もあり、本訳文の作成にあたって参考にした。

段落の区切りについては基本的に『昭代叢書』本のそれに従っているが、あまりに長いと思われる場合には、適宜段落を区切った。各段落の番号は、訳者が便宜的に付したものである。

訳者は平成四年度、五年度、六年度の三カ年にわたり、東京大学大学院の中国文学演習において、この『影梅庵憶語』を取り上げ、全編を読み上げた。この間訳読に参加したのは、青木隆、上田望、エマニユエル・パストリッチ、笠井直美、故小冷賢一、小山裕之、桜田桃子、仙石知子、谷村晃司、羅善姫、根岸宗一郎、林良育、溝部良恵、山本景子の諸君である(五十音順)。ここに記して協力に感謝したい。ほかに多くの方々からお教えを賜わっている。ただもとより訳注の誤りについては訳者大木が全責任を負うものであることはいままでもない。

なお不明の箇所は少なくない。多々ご示教をいただければ幸いである。

『影梅庵憶語』

(1) 愛生於暱、暱則無所不飾、緣飾著愛、天下鮮有眞可愛者矣。矧內屋深屏、貯光闌彩、止憑雕心鏤腎之文人描摹想像、麻姑幻譜、神女浪傳。近好事家、復假篆聲詩、侈譚奇合、遂使西施夷光文君洪度、人人閨中有之。此亦閨秀之奇冤、而噉名之惡習已。

亡妾董氏、原名白、字小宛、復字青蓮。籍秦淮、徙吳門。在風塵雖有艷名、非其本色。傾蓋矢從余、入吾門、智慧才識、種種始露。凡九年、上下內外大小、無忤無間。其佐余著書肥遯、佐余婦精女紅、親操井臼、以及蒙難遘疾、莫不履險如夷、茹荼若飴、合爲一人。今忽死、余不知姬死而余死也。但見余婦執竿粥粥、視左右手罔措也、上下內外大小之人、咸悲酸楚痛、以爲不可復得也。傳其慧心隱行、聞者歎者、莫不謂文人義士難與爭儔也。

余業爲哀辭數千言哭之。格於聲韻不盡悉、復約略紀其概。每冥痛沈思姬之一身、與偕姬九年光景、一齊湧心塞眼。雖有吞鳥夢花之心手、莫克追述。區區淚筆、枯澀黯削、不能自傳其愛。何有於飾。矧姬之事余、始終本末、不緣狎昵。余年已四十、鬚眉如戟。十五年前、眉公先生謂余視錦半臂碧紗籠、一笑墮若。豈至今復效輕薄子漫譜情艷、以欺地下。儻信余之深者、因余以知姬之果異、賜之鴻文麗藻、余得藉手報姬。姬死無恨、余生無恨。

愛情は親しみから生まれるが、親しい相手を描くとなると、どうしても飾りばかりになってしまふものだ。愛情に虚飾が加わると、天下に眞に愛すべきものはなくなってしまうのである。ましてや家の奥深くにひきこもり、光彩を

内にひっそりとたくわえている女性たちについては、ただ文章の彫琢に心を尽くす文人によつて想像され描き出された、麻姑のような幻想的な女性の物語や、神女のようなみだりな記録があるばかりである。近頃では事を好むものが、さらに音楽（戯曲）を利用して、やたらに男女の奇遇を語り、かくして西施・夷光・文君（卓文君）・洪度（薛濤）などが、どこの家の高殿にもいることになってしまった。これはまた優れた女性たちにとつて思いがけない濡れ衣であり、名をむさぼり求めようとする悪しき習いによるものにほかならない。

今は亡き側室董氏、名を白といい、字は小宛、また青蓮とも字した。秦淮に籍があり、呉門に移籍した。花柳界にあつて高名な売れっ子だったが、それが彼女の本来の姿だったわけではない。最初に出会つて意気投合し、わたしに従いたいと誓つて、わが家の門に入つてから、そのさまざまな知恵や才識が、はじめて明らかになつた。それから九年の間、上下内外大小のものたちとも、争うことなく、仲たがいすることもなかつた。彼女は、わたしが書物を著すのを手伝つて、ともに俗世間から逃れ、わたしの妻を助けては針仕事に通じ、自ら水汲みや白ひきをし、さらには艱難（明清の交の混乱）に際会した時にもわたしが重い病氣にかかつた時にも、たいへんなことを何でもないことのようにやつてのけ、つらい事も飽をなめているかのようで、これらすべてを一身に引き受けていた。今突然彼女が死んでしまい、彼女が死んで、わたしも死んでしまったのかもしれない。ただわたしの妻が一人ぼっちでしょんぼりし、なすこともなく左右の手をながめているのを見、上下内外大小のものたちがみな深く悲しみいたんでいるのを見て、ああもう彼女は二度ともどつて来ないのだ、と思ふばかりである。彼女のかしこい心くぼりや隠れた行いなどを人に話すにつけ、聞いた人は、文人や義士でも彼女にはかなうまいといつてくれないものはない。

わたしはこれまでも哀辞数千言を作つて彼女を哭したが、韻文の形式の制約があつて、すっかり表現しきること

ができなかった。そこでまたそのあらましを記録してみようとしているのだが、彼女のことを悲しく思い出すたびに、ともに過ごした九年の間の思い出のシーンが一気に心の中によみがえってきて、目をふさがれてしまい、たとえ鳥を呑み込み花を夢見る程の文才があったとしても、彼女の思い出を追懐して述べることはできないのである。涙に濡れたわたしのつまらぬ筆はなかなか進まず、折角書いてもいやになって消しているばかりで、わたしたちの愛情をうまく伝えることができない。それでどうして虚飾など加えることができようか。まして、彼女とわたしとは、終始よしまな関係ではなかったのであるから。わたしは今や年も四十になり、ひげも眉毛も逆立つほどに伸びきかった。十年前、眉公先生（陳繼儒）がわたしのことを「錦の半臂（婦人の半袖上着）や碧みどりのうすぎぬの衣装箱をみて、にやにやしながら見つめている」なぞと書いてくれたものだが、どうしていまになってふたたび遊び人のまねをして、みだりに恋物語を書きつづり、地下にいる彼女を裏切ることができようか。もしわたしを深く理解してくれる人があって、わたしのこの文章をよりどころに彼女がほんとうに優れた人物であったということを知り、すばらしい傑作をものしてくださるならば、わたしはそのおかげによって彼女に恩返しをすることができるであろう。そして、亡くなった彼女は思い残すことなく、生きたわたしにも心残りがなくなるであろう。

## 【訳注】

○「昭代叢書」本、またその他多くのテキストにおいて、右の一段は二字格下げて印刷されている。内容の上からも、全体の序にあたる部分である。「如臯冒氏叢書」所収の「影梅庵憶語」では、この部分は末尾に「巢民冒襲」と題されて本文と離れたところに収録されており、本文は次の「己卯初夏」云々から始まっている。

○「縁飾」。「史記」「平津侯主父列伝」に「習文法吏事、而又縁飾以儒術」とある。二文字で「飾る」こと。

○「雕心鑲腎」。底本では「雕心鑲質」に作っている。『賜顧堂叢書』本は「雕心鑲腎」に作る。「雕心鑲腎」はもと韓愈の「贈崔立之評事」詩の「勸君韜養待徵招、不用雕琢愁肝腎」にもとづく。文章に彫琢をこらすこと。「雕肝鑲腎」「雕心刻腎」などのヴァリエーションがある。

○「麻姑幻譜」。「神仙伝」巻二「王遠」の条に見える麻姑の物語、また顔真卿の「麻姑仙壇記」など、麻姑に関する説話を指す。吉川忠夫氏に「東海三たび桑田と為る——麻姑仙壇記——」（『書と道教の周辺』平凡社 一九八七）がある。

○「神女浪伝」。宋玉「高唐賦」「神女賦」、曹植「洛神賦」などを指す。

○「近好事家、復仮家声詩」。「今好事家」は、明代の劇作家たちのことであろう。この頃には数多くの戯曲（伝奇）が作られたが、多くは才子佳人の恋愛物語であった。「声詩」の文字は『礼記』楽記に「樂師辨乎声詩、故北面而弦」とある。歌詞のある楽曲、ここでは戯曲を指す。

○「西施・夷光・文君・洪度」。「吳越春秋」巻九「勾踐陰謀外伝」に「惟王選採美女二人而進之。越王曰、善。乃使相者國中、得苧蘿山鬻薪之女、曰西施、鄭旦」とある。『拾遺記』巻三「周靈王」に「越又有美女二人。一名夷光、二名修明。以貢吳」とあり、その注に「蓋即西施、鄭旦之別名」とある。これによれば、「西施」と「夷光」は同一人の名ということになるが、文君は卓文君。洪度は唐の妓女薛濤の字。西施については梁辰魚の『浣紗記』、卓文君については孫柚の『琴心記』などの戯曲作品がある。ここでは彼女たちがともに恋物語の主人公として列挙されている。

○「傾蓋」。「史記」「魯仲連鄒陽列伝」に「諺曰、白頭如新、傾蓋如故」と見える。また『孔子家語』「致思」に「孔子之鄉、遭程子於塗、傾蓋而語終日、甚相親」とある。はじめて出会ったものが、車のおおいを傾けて語り合う。はじめて会ったときから意気投合すること。

○「凡九年」。董小宛が冒家に入った崇禎十五年（一六四二）から、小宛が亡くなった順治八年（一六五一）まで数えて九年。

○「肥遯」。隱遁すること。もとは『易』の「遯」に「上九、肥遯、無不利」と見える。後に隱遁の意になる。陶淵明「自祭文」に「寿涉百齡、身慕肥遯」とある。

○「履險如夷、茹荼若飴」。「履險如夷」は「視險如夷」とも記される。荼はにがな（苦菜）。

○「哀辭数千言」。「如臯冒氏叢書」の「影梅庵憶語」付録に「亡妾董氏小宛哀辭」を収める。末尾に冒襄自身の識語があり「哀文積於胸臆六十五日、兩日夜成。凡二千四百言二百四十韻（哀文 胸臆に積もること六十五日、兩日夜にして成る。凡そ二千四百言二百四十韻）」とある。

○「吞鳥夢花之心手」。「吞鳥」は晋の羅含の故事。羅含は色あざやかな鳥が口の中に飛び込む夢を見、すばらしい文章が書けるようになった（『晋書』卷九二「文苑伝」）。「夢花」は後漢の馬融の故事。花を食べる夢を見て天下の文章をそらんじた（『獨異志』卷中）。また、李白の「夢筆生花」の故事も思い起される（『開元天寶遺事』「夢筆頭生花」）。

○「十五年前眉公先生」。眉公先生は陳繼儒。冒襄の「寒碧孤吟」（『如臯冒氏叢書』所収）に、陳繼儒の「寒碧孤吟叙」（冒襄輯『同人集』巻一にも収む）があり、その中に、

辟疆仙品、若使學道、故是黃鶴背上人。而約束於祖父家訓、不得不以學子業鳴。六藝九家、以及古今萬方之略、多洞達於胸中、見微知著、沈沈不屑爲利齒噉名兒。視錦半臂碧紗籠、一笑瞠若。辟疆年甚綺、名甚宿。而感慨甚多。

辟疆は仙品にして、若し道を学ばしむれば、故より是れ黃鶴背上の人ならん。而るに祖父の家訓に約束せられ、挙子の業を以て鳴らざるを得ず。六藝九家より以て古今万方の略に及ぶまで、多く胸中に洞達し、微を見て著を知るも、沈沈として利齒噉名の児と為るを屑くせず。錦の半臂・碧紗籠を視、一笑瞠若たり。辟疆は年甚だ綺く、名甚だ宿たり、而して感慨甚だ多し。



とある。この「寒碧孤吟叙」の末尾には「陳繼儒宝文堂に書す。時に年七十有八、歳は乙亥に在り、正月廿七日」とある。乙亥は崇禎八年（一六三五）、冒襄二十五歳の年である。「利齒噉名児」は、『世說新語』「排調」篇に見える「噉名客」「利齒児」の文字にもとづく。「錦半臂」「碧紗籠」はいずれも女性の着る美しい着物を指す。

(2) 己卯初夏、應制白門。晤密之云、秦淮佳麗、近有變成、年甚綺、才色爲一時之冠。余訪之、則以厭薄紛華、挈家去金閨矣。嗣下第浪遊吳門、屢訪之半塘。時逗遛洞庭不返。名與姬頡頏者、有沙九畹、楊漪炤。予日遊兩生間。獨咫尺不見姬。將歸棹、重往冀一見。姬母秀且賢、勞余曰、君來數矣。予女幸在舍。薄醉未醒。然稍停復他出。從免徑扶姬於曲欄、與余晤。面暈淺春、頰眼流視。香姿玉色、神韻天然。嬾慢不交一語。余驚愛之。惜其倦、遂別歸。此良晤之始也。時姬年十六。

己卯（崇禎十二年 一六三九 冒襄二十九歳）の初夏、白門（南京）で郷試に応じた。密之（方以智）に会ったところ、「秦淮の美女たちの中では、今双成（小宛のこと）が、とても若く、才色ともに一番だ」という。わたしが訪ねた時には、秦淮の繁華がいやになって、家族ともども金閨（蘇州）に移ってしまった。やがて落第して吳門（蘇州）でぶらぶらしていた時、何度も何度も彼女を半塘に訪ねていった。だが、その時彼女は洞庭に逗留して戻ってこなかった。彼女と甲乙つけがたい名声があったのが、沙九畹、楊漪炤であった。わたしは毎日二人のところで遊んだが、すぐ近くにいながら彼女に会うことができなかった。いよいよ郷里へ帰るときになって、彼女を一目でも見ようともう一度出かけていった。彼女の母は美しくかつ利口な人であったが、わたしをいたわって「あなたは何度も

お越し下さいましたね。むすめは幸い家におります。少しお酒を過ぎ、まだすっかり酔いから醒めておりませんし、しばらくしたらまた出かけなければならぬのですが」といって（彼女にあわせてくれた）。そして花に埋もれた小道から彼女に手を貸しながら出てきて、曲欄のところまでわたしに引き合わせてくれたのである。顔は早春の花のようにほんのりと赤らみ、うるんだ目で流し目を送ってくる。そのかぐわしき容色は、天然自然ともいえるものであった。彼女は物憂そうで一言も言葉を交わさなかったが、わたしは胸がきゅんとなりすっかり心をうばわれてしまった。彼女が疲れた様子なのを残念に思いながら、そのまま別れて帰ってきたのである。これが良き出会いの初め、時に彼女は十六であった。

## 【訳注】

○董小宛との初めての出会いを叙する一段。この間の事情を、張明弼の「冒姫董小宛伝」では次のように記している。

己卯、應制來秦准。吳次尾、方密之、侯朝宗咸向辟疆噴小宛名。辟疆曰、未經平子目。未定也。而姬亦時時從名流讌集間、聞人說冒子。則詢冒子何如人。客曰、此今之高名才子、負氣節而又風流自喜者也。則亦胸次貯之。比辟疆同密之屢訪、姬則厭秦准輩、徒之金閨。比下第、辟疆送其尊人秉憲東粵、遂留吳門。聞姬住半塘、再訪之、多不值。時姬又惡輩、非受糜於炎炙、則必逃之魑魅之徑。一日姬方晝醉睡。聞冒子在門、其母亦慧倩。亟扶出、相見於曲欄花下。主賓雙玉有光。若月流於堂戶。已而四目瞪視、不發一言。蓋辟疆心籌、謂此入眼第一、可繫紅絲。而宛君則內語曰、吾靜觀之、得其神趣、此殆吾委心塌地處也。但即欲自歸恐太遽。遂如夢值故權舊戚。兩意融液、莫不舉似。但連聲顧其母曰、異人、異人。

己卯(崇禎十二年 一六三九)、制に應じて秦准に來たる。吳次尾(応箕)、方密之(以智)、侯朝宗(方域)咸辟疆に向ひて小宛が名を嘖嘖す。辟疆曰く、未だ平子が目を經ず。未だ定まらざるなり、と。而るに姫も亦た時名流讎集の間に從ひ、人の冒子を説くを聞けり。則ち冒子の何如なる人なるかを詢ぬ。客曰く、此れ今の高名才子にして、氣節を負ひ、而して又風流も自ら喜ぶ者なり、と。則ち亦た胸次に之を貯う。辟疆密之と共に屢訪おもむふに比おび、姫は則ち秦准の讐なるを厭ひ、金閨に徙り之けり。下第するに比おび、辟疆其の尊人の憲を東粵に乘るを送り、遂に吳門に留まる。姫の半塘に住むを聞き、再び之を訪ふも、多く値はず。時に姫又讐を惡み、炎灸に糜を受くるに非ざれば、則ち必ず之を鼯鼯の徑に逃る。一日姫方に昼醉ひて睡る。冒子門に在りと聞き、其の母も亦た慧情たり。亟ち扶けて出さしめ、曲欄の花下に相見す。主寶双玉にして光有り、月の堂戸に流るるが若し。已にして四目瞪視し、一言をも発せず。蓋し辟疆が心籌、此の眼に入ること第一にして、紅絲を繋ぎたるべしと謂ふ。而して宛君は則ち内に語りて曰く、吾静かに之を觀るに、其の神趣を得たり。此れ殆ど吾が心を委ね地を塌するの處なり。但だ即ち自ら帰せんことを欲するは太だ遽かならんと恐る。遂に夢に故懂旧戚に値ふが如し、と。両意融液して、拳似せざるはなし。但だ連声其の母を顧みて曰く、異人なり、異人なり、と。

張明弼の「冒姬董小宛伝」は「影梅庵憶語」にもとづいて書かれた董小宛の伝記であるが、時に「憶語」には記されていない事柄も見える。「伝」によって、冒襄の南京秦淮における遊び仲間として、方以智の他に、吳応箕、侯方域たちもあつたことが知られる。

○「己卯初夏、応制白門」。「冒巢民先生年譜」(如臯冒氏叢書)所収)では、崇禎十二年の条に、「科試優等、秋応制金陵」とある。

○「密之」。方以智の字。明末四公子の一人。任道斌「方以智年譜」(安徽教育出版社 一九八三)崇禎九年の条に冒襄「樸巢詩選、文選」附陳名夏「冒辟疆樸巢存稿序」(同人集)卷二にも収められる)をよりどころとして「夏、交冒襄、鼎足文苑」と

ある。ちなみに、鼎足の三人とは冒襄、方以智、張自烈の三人である。同上崇禎十二年の条には張明弼の「冒姬董小宛伝」、侯方域「壯悔堂文集」に附された「侯方域」年譜、「壯悔堂文集」卷二「梅宣城詩序」を引いて、「夏初、応試南京、交侯方域。沈緬声色、為冒襄媒名姬董小宛」とある。ちなみに、方以智、陳貞慧、侯方域、冒襄の四名が「四公子」と呼ばれたことは、韓菼「潛孝先生冒徵君襄墓誌銘」(『碑伝集』卷一二十六)に見える。

○「佳麗」。美人を指す。ただ、「佳麗城」といえば南京のこと。謝朓の「隋王鼓吹曲 入朝曲」に、「江南佳麗地、金陵帝王州」とあって、「佳麗」の語は特に南京と結びついて用いられるようである。余懷の「板橋雜記序」に「金陵古稱佳麗之地。衣冠文物、盛於江南。文采風流、甲於海内」とある。

○「双成」。双成は女仙の董双成。『漢武帝内伝』に「(王母)又命侍女董双成吹雲簫之笙」と見える。一般に妓女を仙女にたとえることがあるが、ここでは特に同じ董姓ということで小宛のことをこのように呼んでいる。後にまた「双成の館」という言い方がある(第九段)。

○「半塘」。蘇州城の西北の地名。蘇州城から虎丘にいたる山塘街の半ばあたりである。この近辺は蘇州随一の行楽地であった。妓館も多い土地である。

○「洞庭」。太湖のなかにある洞庭山のこと。蘇州からは遠くない。だから「咫尺」といういい方も出るのである。

○「沙九腕」。あるいは『板橋雜記』巻中に見える沙才のことか。秦淮から蘇州に来て半塘に住まいを定め、一頃評判になったという(後携其妹曰嫩者、遊吳郡、卜居半塘、一時名噪、人皆以二趙二喬目之)。

○「楊澹炤」。彼女については、冒襄の「南嶽省親日記」に見える。後出(第四段)。

○「兔径」。李賀の「惱公」詩に「隈花開兔径 向壁印狐蹤」とある。細道のこと。

○「面暈」「纈眼」。「纈眼」は、酔眼。庾信「夜聽搗衣」詩に「花鬢醉眼纈」とある。また明の楊基の「無題」詩に「眉暈淺顰横曉緑 臉消淺纈膩春紅」とある。美女の形容の一つのパターン。

(3) 庚辰夏、留滞影園。欲過訪姬、客從吳門來、知姬去西子湖、兼往遊黃山白嶽、遂不果行。

庚辰（崇禎十三年 一六四〇 三十歲）夏、影園に滞在していた。彼女を訪ねて行きたいと思ったが、蘇州から来た人のいうには、彼女は西湖に行き、あわせて黄山白嶽への旅に出たとのことであつたので、行かずじまいになつてしまつた。

【訳注】

○「影園」。揚州の鄭元勳の庭園。「冒巢民先生年譜」崇禎十三年の条には、「与鄭元勳集諸名士於影園、賦黃牡丹詩」とある。「年譜」に引く鄭懋嘉「中翰詩集序」によれば、数多く集まつた黄牡丹詩の評価を下したのが錢謙益であり、状元に推されたのは黎遂球の作であつたという（冒襄の「影園黄牡丹」詩は「同人集」巻五に見える）。影園における諸家の作を集めた鄭元勳輯「影園瑤華集」三巻がある（北京図書館蔵）。影園についてはまた、李斗「揚州画舫録」巻八に詳細な記録がある。それによれば影園は揚州の城南にあつたという。なお、影園の設計をしたのが「園冶」の著者計成であり、「園冶」の序を鄭元勳が書いている。「園冶」には橋川時雄氏の解説を付した影印本がある（渡辺書店 一九七〇）。

○「黄山白嶽」。ともに安徽の名山。道教の聖地。白嶽は、休寧の齊雲山のこと。董小宛が杭州の西湖から黄山白嶽の旅をしたことについては、張明弼「冒姬董小宛伝」には「姬自西湖遠遊於黄山白嶽間者、将三年矣」とある。冒襄が小宛と再会するのは、崇禎十五年二月のことである。

(4) 辛巳早春、余省覲去衡嶽、蘇浙路往。過半塘訊姬、則仍滯黃山。許忠節公赴粵任、與余聯舟行。偶一日赴飲歸、謂余曰、此中有陳姬某、擅梨園之勝、不可不見。余佐忠節治舟數往返、始得之。其人澹而韻、盈盈冉冉、衣椒繭、時背顧湘裙、眞如孤鸞之在煙霧。是日演弋腔紅梅。以燕俗之劇、呀呀啁啾之調、乃出之陳姬身口、如雲出岫、如珠在盤、令人欲仙欲死。漏下四鼓、風雨忽作、必欲駕小舟去。余牽衣訂再晤。答云、光福梅花如冷雲萬頃。子能越旦偕我遊否。則有半月淹也。余迫省覲、告以不敢遲留故。復云、南嶽歸棹、當遲子於虎嘯叢桂間。蓋計其期、八月返也。

辛巳（崇禎十四年 一六四一 三十一歲）早春、わたしは両親を訪ねて浙江經由で衡嶽に行った。道すがら蘇州の半塘に立ち寄って彼女のことをたずねてみたところ、まだ黃山に滞在していて留守だった。許忠節公（許直）が廣東へ赴任するところで、わたしと舟をならべて行った。たまたまある日、宴会からの帰り道でわたしに言った。「ここに陳なにがしという妓女がいて、舞台の世界で名声をほしいままにしている。これは会いに行かないわけにゆくまい」と。わたしは忠節公のために船をととのえ、何度も行ったり来たりしてようやく会う機会を作ることができた。その人は、あつきりしたなかにも気品があつて、しゃなりしゃなり、椒繭の上着を羽織り、時折振り返って湘裙を顧みるさまは、まことに煙霧の中の一羽の鸞のようであつた。この日は、弋陽腔の『紅梅記』を演じた。もともと北方北京の俗劇、がさがさきいきいいうようなメロディーでありながら、これが彼女の口から出ると、まるで雲が山から立ち上るかのよう、真珠が大皿のうえを転がるかのようで、仙人になつて舞い上がるような、そしてもう死んでもいいような気持ちになるのであつた。いつしか時が過ぎ、四更（午前三時ごろ）を告げる太鼓が鳴つた。雨風が突然起こり、小舟に乗って行かねばならなくなつた。わたしは彼女の袖を引っ張つて、もう一度会う約束をしようとした。彼女は

答えた。「光福の梅の花は、冷たい雲が万頃にわたってひろがっているかのようだといいことです。あなた、あしたの朝わたしを連れて遊びにいつてくださいますか。そうしたら半月ばかり逗留しましょうよ」と。だが、わたしは両親を訪ねなければならなかったのです、ここに留まるわけにはいかないのだと答えた。そして付け加えていった。「南嶽からの帰り道、きっとあなたを虎丘の桂花（木犀）のなかでお待ちいたしましょう」と。だいたい数えて、八月には戻れると思つたからである。

【訳注】

○この一段は、崇禎十四年（一六四二）、湖南に赴任していた父を訪ね、あわせて母を迎えに行く途中、陳姫と出会つたことを記す。陳姫とは、後に將軍吳三桂の妾となり、清の入関の原因を作つたとされる、あの陳円円である。この湖南への旅については、冒襄『樸巢文選』卷三に「南嶽省親日記」があり、道中の様子を詳しく知ることができる。これによれば、冒襄は一月六日如臯を発つて、二月二日に蘇州に着き、

初三日、半塘に曹蘭臯を見る。楊漪炤、陳晚芬と共に復た虎丘に登る。天色稍しく霽れ、遊人頗る多し。余石に踞り、跣座すること之を久しうす。……晩に漪炤邀へ留めて暢飲す。

続く四日の条には、

初四日、朱雲子 西山自り帰り、相訂して梅を看んとす。余 行の促るを以て留まることを辞す。令弟望子 齋頭に清譚す

ること半响。旋かに若翁（許直）と共に遊船に登りて晚芬が演劇を見る。水綃霧縠の中に遏雲の響きを聴くこと、生平の耳目遘ふこと罕なり。曙に達し方めて散ず。

とあつて、陳円円の芝居をみたのは二月四日のことであつた。『憶語』では、このあと円円と言葉を交わしたようにいうが、日記のほうにはない。そして、初六日の記録に、

明日纜を解いて行く。天屏・光福の梅花は、冷雲明雪の如くなるも、往きて雲子が翦疏の約に赴くこと克はず。茲に行迫り、省覲せんと欲し、寧ろ山水の友朋に負けるのみ。

とある。日記では、光福の梅見にさそつたのは、朱雲子ということになっていて、陳円円に誘われたのではない。もちろん日記の方を事実に近いと仮定すればの話だが、『憶語』にある陳円円とのことには、かなりの虚構がまじっているのかもしれない。ついでにいえば、冒襄が衡州に到着したのは三月二十八日のことである。

張明弼の「冒姫董小宛伝」では、先に引いた部分に続いて、「此三年中、辟疆在吳門、有某姫、亦傾蓋輸心。遂訂密約。然以省覲往衡嶽、不果（此の三年の中、辟疆呉門に在りて、某姫有り、亦た傾蓋心を輸す。遂に密約を訂す。然れども省覲衡嶽に往くを以て、果さず）」とあつて、相手が陳円円であることを隠したい方になっている。

○「衡嶽」。衡嶽は南嶽衡山（湖南省）。嘉慶『如臯県志』卷一六、列伝一、冒起宗伝には「冒起宗、字宗起、号嵩少。……服闋、備兵嶺西、以卓異聞。旋調湖南衡永參議。会張猷忠破襄陽、再調襄陽監軍。独与左良玉收合餘燼。歷一歲、以城守招撫功被上賞量、調宝慶、即弘衣掃」とある。崇禎十四年の一月、冒襄が父の憲副公冒起宗をたずねて如臯を出発した時点では、父は衡州（湖南省）にあった。



○「蘇浙路往」。如阜から衡州に行くには、長江をさかのぼるルートと、杭州から金華を通り、江西に抜けるルートがあった(楊正泰校注「天下水陸路程 天下路程図引 客商一覽醒迷」山西人民出版社 一九九二、楊正泰「明代驛站考」上海古籍出版社 一九九四)。冒襄はこの後者をえらんだのである。長江のあたりは張獻忠の勢力範囲で危険、という判断だったのだろう。

○「許忠節公」。許直。「明史」巻二六六に伝あり。この時廣東惠來県の知県として赴任。冒襄「南嶽省親日記」によれば、一月六日に如阜を出発してまもなくの一月十一日に揚州でいっしょになり、二月三十日に衢州(浙江省)で別れている。冒襄「樸巢詩集」巻四には十五年の後にこの旅を回想して作った長文の題を持つ詩(「許忠節公以忠孝經濟自勵、不留意韻語。辛巳、余省觀赴衡嶽……」)がある。許直は明清交替の際、明王朝に殉じた。「明史」本伝によれば、福王のときに忠節とおくりなされ、清になって忠愍とおくりなされたという。

○「衣椒繭、時背顧湘裙」。この部分、右のように訳したがよくわからない。「椒繭」の「椒」は、あるいは「椒房」「椒閣(皇妃、貴婦人の住まい)の「椒」につながるものであろうか。宮廷風のお蚕ぐるみ。「湘裙」は、湘夫人のような長いスカート。『琵琶記』「強就鸞鳳」に「湘裙展六幅、似天上嫦娥降塵俗」の用例がある。煙霧の中の孤鸞といった形容から推して、幅広で長いのであろう。文徵明や陳洪綬の描いた湘夫人図を見ても、みな長いスカートが特徴的である(『楚辭図』人民文学出版社 一九五三)。

○「弋陽紅梅」。『紅梅記』は、明の周朝俊作の戯曲。瞿佑の『剪燈新話』巻四「綠衣人伝」にもとづく。南宋の権臣賈似道の侍妾李慧娘は、西湖に遊ぶ書生の裴生を賞賛したことが賈似道の怒りに触れ、殺されてしまう。慧娘は後に幽霊になってあらわれ、窮地におちいった裴生を救う。陳円円は、主人公の李慧娘を演じたものであろう。弋陽腔は江西の弋陽に起こった演劇の声腔。弋陽腔について、田仲一成『中国祭祀演劇研究』(東京大学東洋文化研究所報告 一九八一)五一―八頁には「この記事(范濂『雲間掘目抄』)にも見えるように弋陽腔は、雅調を尊ぶ江浙の劇界では俗悪として貶められていたが、新安商人のバックがあったために、社交演劇の場から消え去ることはなく、第二流の位置を保ち続けたようである」とある。「呶呶啞啞」という冒襄の弋

陽腔評価はまさにこうした江南文人の弋陽腔評価の一例にあたる。ただ、ここで冒裏が「燕俗の劇」といつているのは、どういふことだろうか。

○「孤鸞之在煙霧」。この表現は江淹の「雜体 詠扇」詩に「画作秦王女 乘鸞向煙霧」とあるのにもとづくか。

○「仙」。舞い上がると訳したのは、杜甫の「覽鏡呈柏中丞」詩に「行遲更覺仙」の句があり、九家注が「仙者身輕歩疾」と注しているのに拠る。

○「光福」。蘇州西方、太湖近くの行樂地。光福にある鄧尉山が梅林として著名である。

○「当遲子於虎膠叢桂間」。虎膠とは滸墅のことである。「輿地記」によれば、虎丘はそもそもそこに吳王闔閭を葬った時、一匹の虎があらわれて守ったために虎丘と名づけられた。秦の始皇帝が各地を巡った折、虎丘を訪れ、吳王の宝剑を求めようとした。するとその虎が現れた。始皇が剣で撃とうとすると、虎は西の方二十五里のところまで逃げて消えた、その場所が「虎膠」であり、唐及び五代の避諱によって「滸墅」になった、という。滸墅は水路の要衝であつて、閔所（滸墅閔）が設けられていた。本来、滸墅と虎丘は別の場所であるが、冒裏は虎丘のことを虎膠と呼んでいるのではないかと思われる。虎丘で桂（きんもくせい）の花の時に会おう、というが、蘇軾の「次韻王忠玉遊虎邱」詩に「白髮重来故人尽、空餘叢桂小山幽」とあり、陳維崧の「賀新涼 丙辰中秋看月虎丘同雲臣雪持賦」詞に「簇坐広場紛笑語 何処香飄桂子」とあるように、虎丘の中秋といえば桂花が思い起されたようである。

(5) 余別去、恰以觀濤日奉母回。至西湖、因家君調已破之襄陽、心緒如焚。便訊陳姬、則已爲寶霍豪家掠去、聞之慘然。及抵闔門、水澀舟膠、去滸關十五里、皆充斥不可行。偶晤一友、語次有佳人難再得之歎。友云、子誤矣。前以勢劫去者、贖某也。某之匿處、去此甚邇。與子偕往。至果得見。又如芳蘭之在幽谷也。相視而笑曰、子至矣。子非雨夜

舟中訂芳約者耶。曩感子慇懃、以凌遽不獲訂再晤。今幾入虎口得脫、重晤子、眞天幸也。我居甚僻、復長齋。茗椀爐香、留子傾倒於明月桂影之下。且有所商。

わたしは彼女と別れた後、ちょうど觀潮の日に母を奉じて（杭州まで）戻ってきた。西湖に着いたところで、父上が敵に破られた襄陽に転動になったとの知らせに接し、心の中は焼けつかんばかりであつた。すぐに陳姫のことをたずねてみたが、すでに寶霍（皇帝の外戚）の豪家につれ去られた後とのことで、聞いて胸ふさがつた。蘇州の閩門に着こうとするところで、船が渋滞し、滯野閑までの十五里がふさがつて進むことができない。たまたまある友人に会つて、話が「佳人は再びは得難し」の嘆きになつた。友人のいうには、「君はまちがつている。前に力づくで強奪されていつたのは、替え玉さ。彼女の隠れ家は、ここからすぐのところだ。一緒にいこう」と。いつてみると、果して会うことができた。また人里離れた谷間に咲く芳しい蘭のごとくであつた。彼女はわたしを見、笑つて「あなたはやつて来てくださったのですね。あなたは、あの雨の晩、船の上で、また会いたいといつてくださった方でしたね。先にはあなたがお優しいのに心動かされましたが、あなたがお急ぎだつたために再びお目にかかる日を決めることができなかったのですわ。今すんでのところで虎口を脱することができ、そこであなたと再会できたのは、ほんとうに天の助けです。わたしの住まいはひどくいなかじみていますし、ながくなまぐさ断ちをしております。銘茶とお香とを友にして、桂（木犀）の木陰で月を見ながら語り明かしましょうよ。ご相談したいことがあるんですの」という。

【訳注】

○「冒巢民先生年譜」崇禎十四年の条に引く「馬恭人行狀」に「先君子命襄奉吾母帰」とある。

○「觀濤日」。錢塘江のあげ潮であるが、これがさかのぼってくるのは、八月十五日ごろのこと。

○「心緒如焚」。襄陽が張獻忠の手に陥ちたのは、崇禎十四年二月六日（計六奇「明季北略」卷一七「張獻忠陷襄陽」。冒襄が衡州への旅途にあるとき）のことであるから、父が襄陽へ移動になったのは、その後のことになる。韓焘の「潜孝先生冒微君襄墓誌銘」（「碑伝集」卷二二六）には、「先生往覲、奉恭人以帰。帰而不入寝。或問之。先生曰、父在残疆、而子安枕席乎（先生覲に往き、恭人を奉じて以て帰る。帰りて寝に入らず。或ひと之を問ふ。先生曰く、父残疆に在り、而るに子枕席を安んぜんや、と）。冒襄にはまた孝子としての一面があった。

「冒巢民先生年譜」崇禎十五年の条にはまた「嵩少公墓誌」を引いて、当時の襄陽の状況を次のように説明する。「襄陽新為闖猷屠破、勢更危於曹漢。左良玉臨張於荆樊、張猷忠蟻聚於綿竹、降賊數十万、復出沒肘腋間（襄陽新たに闖猷に屠破せられ、勢更に曹漢よりも危うし。左良玉荆樊に臨張するも、張猷忠綿竹に蟻聚し、降賊数十万、復た肘腋の間に出没す）」。

○「寶霍」。前漢時代の外戚として権勢をふるった寶氏と霍氏のこと。ここで具体的に指しているのは、崇禎帝の皇后周氏の父周奎（周嘉定伯、蘇州の人）あるいは田貴妃の父田弘遇である。鈕琇の「觚賸」卷四「円円」の記述によれば、崇禎帝は田貴妃を寵愛し、周皇后を疎んじていたので、周嘉定伯は蘇州に帰った折、才色兼備の妓女を買ひ求め、崇禎帝に進めて、田貴妃への寵愛を削ごうとしたのだという。別に陸次雲の「円円伝」（「虞初新誌」卷一一）では、田貴妃の父が買ひ求めたことになっている。陳寅恪「柳如是別伝」第四章「河東君過訪半野堂及其前後關係」（七六二頁）がこの事件に触れる。

○「滄墅関」。蘇州の西北、大運河上に設けられた関所。香坂昌紀「清代滄墅関の研究」（「東北学院大学論集 歴史学・地理学」三、五、一三、一四。一九七二、一九七五、一九八三、一九八四）がある。

○「佳人難再得」。漢代の「李延年歌」、「寧不知傾城与傾国、佳人難再得」。

○「芳蘭之在幽谷」。『淮南子』「說山訓」に「蘭生幽谷、不為莫服而不芳（蘭の幽谷に生ずるや、服するものなきが為に芳しからざることあらず）。陸機「擬涉江采芙蓉」詩（『文選』卷三〇）に「上山采瓊蕊、穹谷饒芳蘭」。

○「凌遽」。顏延之「應詔觀北湖田收」（『文選』卷二二）に「疲弱謝凌遽」。李善の注に「凌遽、捷速貌」とある。『漢語大詞典』に「迅速、急促」と釈する。

(6) 余以老母在舟、緣江楚多梗、率健兒百餘護行、皆住河干、豐豐欲返。甫黃昏而砲械震耳。擊礮聲如在余舟傍、亟星馳回、則中貴爭馳河道、與我兵鬪。解之始去。自此余不復登岸。

わたしは老母が船にいたし、江蘇から湖南湖北にかけては道が寸断され危険が多かったので、屈強な男子百人あまりを率いて行って護衛させており、彼らがみな川の岸边に泊まっていたこともあつて、急いで帰りたかつた。日が暮れたばかりの頃、大砲の音が耳を震わせた。大砲を撃つ音はわたしの船のそばのようだったので、ただちに大急ぎでもどつたところ、宦官が渋滞のなか無理に進もうとして、わたしの兵と争っていたのであつた。わたしがなだめて（宦官の船は）やっと去っていった。これ以後わたしはもう岸へ登らなかつた。

### 【訳注】

○道中の危険とは、李自成や張獻忠らが出没したことをいう。それにしても、この冒氏のどちらかといえは私的な旅行のために、百人もの「兵」を率いており、宦官とまでも争つたというあたりには驚かされる。

(7) 越旦、則姬澹妝至、求謁吾母太恭人。見後重堅訂過其家。乃是晚、舟仍中梗、乘月一往。相見、卒然曰、余此身脫樊籠、欲擇人事之。終身可托者、無出君右。適見太恭人、如覆春雲、如飶甘露、眞得所天。子母辭。余笑曰、天下無此易易事。且嚴親在兵火、我歸、當棄妻子以殉。兩過子、皆路梗中無聊閑步耳。子言突至、余甚訝。卽果爾、亦塞耳堅謝。無徒誤子。復宛轉云、君儻不終棄、誓待君堂上畫錦旌。余答云、若爾、當與子約。驚喜申囑、語絮絮不悉記。卽席作八絕句付之。

翌朝、彼女は薄化粧でやってきて、母の太恭人への目通りを求めた。会ったあと、彼女の家に来るよう重ねてかく約束させられた。そこでその晩、船は相変わらず渋滞中であつたので、月に乗じて出かけていった。顔を見るやいなや、彼女はだしぬけにいった。「わたしのこの身は、ちょうど籠の中から抜け出したところで、どなたか人を選んでお仕えしなければなりません。一生を託すことができるのは、あなたをおいてほかにありません。ちょうど母上様にお目に掛かりましたが、春の雲におおわれたような、甘露をたらふくいただいたような気持ちになり、眞にお仕えすべき方を得たようです。どうかおいやとはいわないでください」と。わたしは笑つて、「世の中にはそんなに簡単にできることはないのだよ。しかも父上が兵火の中におられるのだから、わたしは郷里に帰つたら、妻子に別れを告げて命を捨てる覚悟なのだ。二度おまえを訪ねたのは、渋滞中の退屈ゆえの散歩なのさ。おまえが突然こんなことを言い出すのが、わたしにはまったく理解できない。もしほんとにそうだったとしても、耳を塞いでかたくお断りするしかない。いたずらにおまえの身の振りをあやまらせたくないからだ」というと、またしみじみ「あなたがもしお見限りでなかつたら、誓つてお父上が故郷に錦をかざられるまでお待ちいたします」という。わたしは「そういうことなら、

おまえと約束しよう」と答えた。彼女は驚喜して、よろしくお頼み申しますといったが、そのくどくどしたことは、ひとつひとつは覚えていない。その場で絶句八首を作り、彼女に贈ったのである。

【訳注】

○「太恭人」。冒襄の母は馬氏。『巢民文集』巻七に「老母馬太恭人七十乞言 己亥」を収める。馬家は、恭人の祖父（馬洛）、曾祖父（馬紳）、高祖（馬繼祖）と三代にわたって進士を輩出している如臯の名族である。馬繼祖、馬紳の両名は嘉慶「如臯臯志」巻一六、列伝一に立伝される。

○「當棄妻子以殉」。冒襄の妻は蘇氏。崇禎二年（一六二九）冒襄十九歳の年に嫁いでいる（『冒巢民先生年譜』崇禎二年）。陳維崧に「蘇孺人伝」がある（『同人集』巻三）。やはり如臯の名族の出身。曾祖父の蘇愚は嘉慶「如臯臯志」巻一六、列伝一に立伝されている。中書舍人蘇文韓の三女。『冒巢民先生年譜』によれば、崇禎七年に長男の衰、崇禎八年には次男の禾書、崇禎十二年には三男の丹書が生まれている。長男の衰は崇禎十一年に亡くなっている。

○「昼錦」。『漢書』「項籍伝」の「富貴不帰故郷、如衣錦夜行」にもとづく表現。「衣錦昼行」。故郷に錦を飾ること。

(8) 歸歴秋冬、奔馳萬狀。至壬午仲春、都門政府言路諸公、恤勞臣之勞、憐獨子之苦、馳量移之耗、先報余。時正在毘陵、聞音如石去心。因便過吳門慰陳姬。蓋殘冬屢趣余、皆未及答。至則十日前復爲寶霍門下客、以勢逼去。先、吳門有姬之者、集千人譁劫之。勢家復爲大言挾詐、又不惜數千金爲賄。地方恐貽伊戚、劫出復納入。余至悵惘無極。然以急嚴親患難、負一女子無憾也。

帰つてからの秋から冬にかけては、あれやこれや奔走して回つた。壬午（崇禎十五年 一六四二—三十二歲）の仲春になつて、中央政府の言官の諸公は苦勞した臣下の勞をねぎらい、一人息子の苦衷を憐れんで、人事移動の知らせを走らせ、まずわたしに通知して来た。わたしはその時ちようど毘陵（常州）にいたが、知らせを聞いて心から重石がとれたようであつた。蘇州を通りかかつたついでに、陳姫を慰めようと思つた。冬の終わりがらからしばしばわたしに催促の手紙をよこしていたのに、返事も出さずにいたからである。やつて来てみると、十日前にまた竇霍（皇帝の外戚）の豪家の手下の者に力づくでつれ去られたあとであつた。それより先、蘇州の彼女のなじみが、千人もの人を集め、大騒ぎして彼女を奪つていった。外戚はまた大言を吐いて（彼女のなじみを）おどし、また一方で数千金の賄賂を蘇州の地方官に贈つた。地方官はめんどうなことになるのをおそれ、彼女を奪い取つて外戚に引き渡した。わたしはやつてきて、茫然としてしまったのであつた。しかし、父上の苦難を救うことにやつきになつていた時のことだから、一女子に背いても心残りはないのである。

## 【訳注】

○ 父の移動については、『冒巢民先生年譜』崇禎十五年に「憲副公調宝慶、尋告帰」とある。同条に引く「嵩少公墓誌」には、「公子念父以勞臣踐危疆、戒家人不令公知、而陰泣血上書。政府同郷之孫黃門、顔銓部、成侍御又翁然咸頌公子才、而嘉其孝、力為之爭。乃得再移宝慶。而公浩然乞骸骨帰。帰未兩月、襄陽復破（公子 父の勞臣を以てして危疆を踐むを念ひ、家人を戒めて公をして知らしめず、陰かに泣血上書す。政府同郷の孫黃門、顔銓部、成侍御又翁然として咸な公子の才を頌し、而して其の孝を嘉し、力めて之が為に争ふ。乃ち再び宝慶に移るを得たり。而して公浩然として骸骨を乞ひて帰る。帰りて未だ兩月



ならずして、襄陽復た破る」とある。

○「恐貽伊戚」。『詩經』小雅・小明の「心之憂矣、自貽伊戚（心の憂い、自ら伊の戚い<sup>おそ</sup>いを貽<sup>おこ</sup>れり）」を踏まえる。

(9) 是晚壹鬱、因與友覓舟去虎嘍夜遊。明日、遣人之襄陽、便解維歸里。舟過一橋、見小樓立水邊。偶詢友人、此何人之居、友以雙成館對。余三年積念、不禁狂喜、即停舟相訪。友阻云、彼前亦爲勢家所驚、危病十有八日。母死、鐻戸不見客。余強之上、叩門至再三、始啓戸。燈火闌如、宛轉登樓、則藥餌滿几榻。姬呻吟詢何來。余告以昔年曲欄醉晤人。姬憶、淚下曰、曩君屢過余。雖僅一見、余母恆背稱君奇秀、爲余惜不共君盤桓。今三年矣。余母新死、見君憶母、言猶在耳。今從何處來。便強起揭帷帳審視余。且移鐻留坐榻上。譚有頃、余憐姬病、願辭去、牽留之曰、我有八日寢食俱廢、沈沈若夢、驚魂不安。今一見君、便覺神怡氣王。旋命其家具酒食、飲榻前。姬輒進酒、屢別屢留、不使去。余告之曰、明早遣人去襄陽、告家君量移喜耗。若宿卿處、詰旦不敢報平安。俟發使行、寧少停半刻也。姬曰、子誠殊異、不敢留。遂別。

この晩、落ち込んでいたので、友人と船を雇って、虎丘へ行って夜遊びをした。翌日、人を襄陽に派遣したら、すぐにもつなを解いて故郷に帰るつもりであった。船がある橋を過ぎたところで、水辺に立つ小さな高殿が見えた。たまたま友人に、これはどこのどなたの住まいなのかと尋ねてみると、友人は双成（董小宛）の館だと答えた。わたしは三年間の積もり積もった思いから、狂わんばかりに喜ぶことを禁じえず、すぐに船を泊めて訪ねて行こうとした。友人がさえぎっていうには、「彼女もまた勢力家におどかさされ、危篤におちいって十八日になる。彼女の母は死んでし

まったし、戸を閉ざして客に会わないのだ」という。わたしはそこを強いて上がって行き、何度も扉をノックして、ようやく扉が開いた。部屋の明かりは暗く、ぐるぐる回つて高殿を登ってゆくと、机とベッドは薬だらけであった。彼女はあえぎあえぎ、「いったいどなたか」と尋ねた。わたしは「以前あなたが酔つておられたとき、曲欄のところでお目にかかったものです」と答えると、彼女は思い出して涙をこぼし、「前にあなたは何度もわたしのところをたずねてくださいましたですね。たった一度お目に掛かっただけでしたが、母はいつもあなたがすばらしいお方だといって、わたしがあなたとなじみになれないことを残念がつておりました。あれから三年ですね。母は亡くなったばかりで、あなたを見ても母のことが思い出され、その母のことばがまだ耳元にあるようです。いまはどちらからいらしたのですか」というと、無理に起きあがつてベッドのとばりを掲げ、わたしの顔をよく見ようとしたり。さらに燈火をどけて、わたしをベッドに腰掛けさせた。しばらく語りあつて、わたしは彼女の病氣を考え、辞去しようとしたが、引き留めて、「わたしはこの十八日間、眠れもしなければ食べ物ものどを通らず、ぼおつと夢のなかにいるようで、魂も落ちつきませんでした。ですが、今あなたにお目に掛かったとたん、嬉しくなつて、元氣も出てきたように思われます」といい、ただちに家のものに命じて酒や食事を準備させ、ベッドのところを酒を酌んだ。彼女みずから酒を勧めてくれ、何度辞去しようとしてもそのたびに引き留められ、なかなか帰してくれない。わたしは彼女に「明日の朝、人を襄陽にやつて、父上の人事移動のよい知らせを持って行かせなければなりません。もしあなたのところに泊まつてしまつたならば、明朝平安を告げ知らせる使いを送り出せなくなつてしまいます。使いが行つてしまつてから、またしばらくやつてまいりましょう」といった。彼女は「それはたしかに特別のご事情ですね。お引き留めいたしません」といつて別れた。

【訳注】

○「舟過一橋、見小樓立水辺」。張明弼の「冒姬董小宛伝」には「偶月夜、蕩葉舟隨所飄泊。至桐橋、見小樓如函、閑立水涯」とある。桐橋は、山塘にあつた橋、勝安橋。顧祿「桐橋倚棹録」卷七に「勝安橋、即桐橋。在山塘。……」とあり、そこに引かれる李其永「桐橋舟中得句」詩は、「橋西七十里、不断往来波。千古蛾眉女、此中載得多。三春紅燭夜、一片画船歌。自昔成風俗、流波奈若何」といった内容である。桐橋は山塘の色町にあつたのである。

(10) 越旦、楚使行。余急欲還、友人及僕從咸云、姬昨僅一傾蓋、拳切不可負。仍往言別。至則姬已妝成、凭樓凝睇。見余舟傍岸、便疾趨登舟。余具述即欲行、姬曰、我裝已戒。隨路祖送。余却不得却、阻不忍阻。由潞關至梁溪、毘陵、陽羨、澄江、抵北固、閱二十七日、凡二十七辭、姬惟堅以身從。登金山誓江流曰、妾此身如江水東下、斷不復返吳門。余變色拒絶。告以期逼科試、年來以大人滯危疆、家事委棄、老母定省俱違、今始歸經理一切。且姬吳門責逋甚衆、金陵落籍、亦費商量。仍歸吳門。俟季夏應試、相約同赴金陵。秋試畢、第與否、始暇及此。此時纏綿、兩妨無益。姬仍躊躇不肯行。時五木在几。一友戲云、卿果終如願、當一擲得巧。姬肅拜於船窗、祝畢、一擲得全六。時同舟稱異。余謂果屬天成、倉卒不臧、反債乃事。不如暫去、徐圖之。不得已。始掩面痛哭失聲而別。余雖憐姬、然得輕身歸、如釋重負。

翌朝、楚に行く使いは出発していった。わたしはすぐに郷里に戻ろうとしたが、友人や従僕たちがみな「昨日彼女とはちよつと会って話すだけの時間しかありませんでした。彼女の真剣な気持ちに背いてはいけません」というので、

行つて別れを告げることにした。行つてみると、彼女はもうすっかり装束をととのえ、高殿の上においてこちらをじつと見つめている。わたしの船が岸につくやいなや、駆け下りて来て船に飛び乗つたのである。わたしがすぐに出発したいのだと告げると、彼女は「わたしもすっかり準備が整つています。道中お見送りしましょう」という。わたしは断ろうと思つても断れず、やめさせようと思つてもやめさせるに忍びないのであつた。潛墅関から梁溪(無錫)、毘陵(常州)、陽羨(宜興)、澄江(江陰)を経て、北固山(鎮江)に至るまで二十七日、二十七回彼女と別れようとしたが、彼女はかたい決心でずつとつき従つて来た。金山に登つた時、長江の流れに誓つていった。「わたくしのこの身は長江の水が東に流れ、もどつて来ることがないのと同じように、決して二度と蘇州にはもどりません」と。わたしは顔色を変えて拒絶し、彼女に次のように告げたのである。科試(郷試の予備試験)の期日が迫つているし、ここ数年来父上が危険な場所におられたために、家のことはすておいており、老母への朝夕の挨拶も思うようにならなかつた。今ようやく帰れても、あらゆることを処理しなければならぬ。しかも、彼女は蘇州では借金の取り立てに来るものがはなはだ多く、南京での落籍にもまだ手間がかかるであろう。だから、さしあたつてはもとのように蘇州に帰るがよい。夏の末の試験(科試)が終わつたら、そのとき一緒に南京に行こう。秋の試験(郷試)がすんだら、合格しようがしまいが、はじめてことを図る時間ができるであろう。いまここでまとわりついていることは、わたしたち二人にとつて、害があるばかりで一つもよいことがない、と。彼女はそれでもまだためらつており、行こうとしなかつた。その時、五木(さいころ)が机の上にあつた。ある友人が冗談で「最後にあなたの願いがかなうなら、一振りでよい目が出るはずだ」といった。彼女は船の窓から恭しく拝し、祈り終わると、一振りで六のぞろ目が出た。船じゅうのもの、これはすごいと驚いた。わたしはいつた、「なるほどこれは天が事をまとめようとしているのだから、あわて

てまずく事をおこなうと、かえつてだめになってしまう。だからいまのところは帰つて、ゆっくり事を図つた方がよい、しかたがないのだ」と。彼女は手で顔をおおつてひどく泣き叫び、話すこともできないままに別れたのである。わたしは彼女がかわいそうではあつたが、身軽で帰ることができ、重荷を解かれたように思つたのであつた。

【訳注】

○「姫昨僅一傾蓋」。底本は「姫昨僅一倚蓋」に作る。「美化文学名著叢刊」によつて「傾蓋」に改めた。「傾蓋之間」は短い会見の時間。

○「見余舟傍岸」。底本は「見余舟登岸」に作る。「美化文学名著叢刊」によつて「傍岸」に改めた。

○「金山」。鎮江近くの長江にある三つの山(北固山、金山、焦山)、いわゆる京口三山の一つ。金山には金山寺、天下第一泉などの名所がある。

○「姫呉門責通甚衆」。張明弼「冒姫董小宛伝」には、「姫時有父多嗜好、又蕩費無度。恃姫負一時冠絶名、遂負通數千金。咸無如姫何也(姫時に父の嗜好多き有り、また費を蕩ること度無し。姫の一時の冠絶の名を負ふを恃み、遂に通を負ふこと數千金なり。咸な姫を如何ともする無きなり)」とあつて、董小宛の父親が売れっ子であつた娘をかたに莫大な借金をしていたということになつてゐる。

○「秋試畢」。底本は「秋事畢」に作る。「美化文学名著叢刊」によつて「秋試畢」に改めた。秋試は、郷試のこと。

○「五木」。五木は、古代における賭博の用具があるが、ここでは「全六」などといういいかたからみて、さいころの事ではなにかと思われる。さいころは五木から発展したものともいわれる。大谷通順「五木の形状と樗蒲の遊戯法について——『五木經』の合理的解釈——(上)(下)」「北海学園大学学園論集」第六七、六八号 一九九〇、一九九一)がある。

(11) 纔抵海陵、旋就試。至六月抵家、荆人對余云、姬令其父先已過江來云、姬返吳門、茹素不出、惟翹首聽金陵偕行之約。聞言心異、以十金遺其父去曰、我已憐其意而許之。但令靜侯場事畢後無不可耳。余感荆人相成相許之雅、遂不踐走使迎姬之約。竟赴金陵、侯場後報姬。

海陵(泰州)についたところで、すぐさま科試に赴いた。六月になって家に着くと、妻がわたしにいった。「彼女は早くも父親に長江を渡ってやって来させ、いうには、彼女は蘇州に帰ってからというもの、なまぐさ断ちをして家に閉じこもったままで、ただひたすら首を長くして南京へ一緒にゆく約束の連絡を待っている、とのこと。これを聞いて妙な気がしましたが、十両の銀子を渡して父親を帰らせ、こういつてやりました。わたしは彼女の気持ちを憐れんで申し出を認めてあげたいと思いますが、おとなしく科挙の試験がおわるのをまつてからでも、悪いことはないのではないですか、と」。わたしは、協力し、認めてくれた妻の優しさに感激し、使いを走らせて彼女を迎えにやるという約束を果たさなかった。そして結局、南京にいつて、郷試が済んだあと、彼女に連絡することにしたのである。

【訳注】

○この正妻の蘇氏、借金を背負っていたらしい董小宛の父については前出(第七段、第十段)。

○「但令静侯場事畢後」。底本は「但令静畢場事後」に作る。ここは『賜硯堂叢書』本によって改めた。

(12) 桂月三五之晨、余方出闈、姬猝到桃葉寓館。蓋望余耗不至、孤身挈一嫗、買舟自吳門。江行遇盜、舟匿蘆葦中、

舵損不可行、炊煙遂斷三日。初八抵三山門、又恐擾余首場文思、復遲二日始入。姬見余雖甚喜、細述別後百日、茹素杜門與江行風波盜賊驚魂狀、則聲色俱淒。求歸遼固。時魏塘雲間閩豫諸同社、無不高姬之識、憫姬之誠、咸爲賦詩作畫以堅之。場事既竣、余妄意必第、自謂此後當料理姬事、以報姬志。

桂花香る八月十五夜の日、わたしが試験場を出るやいなや、彼女がだしぬけに桃葉渡の宿舎にやってきました。わたしからの便りがいくら待ってもやって来なかつたので、たった独り、老女一人をつれて、船を雇い、蘇州から来たのである。長江を航行中、強盗に出くわし、船を葦の間にかくしたが、舵がこわれて進めることができなくなり、三日の間、食べ物をお口にすることができなかつたのだという。彼女は八月八日に（南京の）三山門に着いたが、わたしの第一場の試験のために気を散らせてはいけなないと考え、二日過ぎてからようやく城内に入ってきたのである。彼女はわたしと会えてたいへん喜んだが、わたしと別れてからの百日間、なまぐさものを断ち門を閉ざしていたこと、そして長江を航行中の苦勞、強盗にあつて肝をひやしたなどを事細かに述べる様子には、いたましいものがあつた。そして、わたしのもとに身を寄せたいとますます強く求めるのであつた。時に、嘉善・松江・福建・河南の同社のものたちは、彼女の人を見る目を高く評価し、彼女の真剣な気持ちを憐れまないものはなく、みな彼女のために詩をつくり絵を描き、彼女をほめましたのである。試験が終わつて、わたしは勝手に、絶対合格だと思ひ、これからは彼女のことをかたづけ、その心に報いてやらなければならぬ、と思つていた。

【訳注】

○「桂月三五之晨」。科挙の郷試では、八月八日に入場、八月九日に第一場の試験がはじまる。そして十五日の朝から第三場の試験がはじまる。冒裏は十五日の朝に答案を提出して、試験場を出てきたというのだが、これはどういうことであろうか。ここは疑問を存しておく。試験が終われば、中秋の名月である。

○「桃葉」。桃葉は東晋の王猷之の愛妾の名。王猷之は彼女に「桃葉歌」を贈り、桃葉は「团扇歌」を作ってそれに答えた。南京城内の利涉橋のあたりを桃葉渡といった。貢院のすぐ近くである。

○「三山門」。南京城の西方の門。長江から南京に入つてこようとすると、まず三山門にあたる。三山門からのびる三山街には書店が多くあったことで知られる。三山街を東に行くと貢院もあり、秦淮の色町もある。この一角は、当時の学生街であつたとおぼしい。

○「魏塘雲間閩豫諸同社」。魏塘は嘉善（現在上海市嘉善県）のこと。「復社紀略」巻一の復社名簿をみると、嘉善にも復社成員が多かったことが知られる。「冒辟疆文序」（「同人集」巻一）を書いた魏学濂は嘉善の人。雲間は松江。幾社で知られる。豫（河南）の出身者には侯方域がいる。閩（福建）では、やはり「冒辟疆文序」（「同人集」巻一）を書いた周吉は福建莆田の人。

(13) 詎十七日、忽傳家君舟抵江干。蓋不赴寶慶之調、自楚休致矣。時已二載違養、冒兵火生還、喜出望外。遂不及爲姬商去留。竟從龍潭尾家君舟抵鑾江。家君閱余文、謂余必第、復留之鑾江候榜。姬從桃葉寓館仍發舟追余。燕子磯阻風、復幾懼不測、重盤桓鑾江舟中。七日乃榜發、余中副車。窮日夜力歸里門。而姬痛哭相隨、不肯返。且細悉姬吳門諸事、非一手足力所能了。責逋者見其遠來、益多奢望、衆口狎狎。且嚴親甫歸、余復下第意阻、萬難卽詣。舟抵郭外樸巢、遂冷面鐵心與姬決別、仍令姬歸吳門。以厭責逋者之意、而後事可爲也。



ところがあにはからんや、十七日になってだしぬけに父上の船が長江の岸に着いたと知らせて来た。転任になった宝慶へ赴任せず、湖北から辞表を出してしまわれたのである。この時、はや二年もの間、父上に孝養を尽せずいたのが、兵火の中から生還されたのであるから、喜びもことのほか大きかった。それで、彼女のために身の振りをはかってやることができなくなってしまったのである。結局龍潭から父上の船に従って、豊江（儀徴）まで来た。父上は、わたしの答案の文章をごらんになって、きつと合格だろうといわれ、わたしを豊江に留まらせて合格発表を待たせることにした。彼女は桃葉渡の宿舎から船を出してまたわたしを追いかけて来た。燕子磯では風に阻まれて、すんでのことで大変な目にあうところであつたというが、豊江の船の中でまた一緒に過ごしたのである。九月七日になって発表があつたが、わたしは副榜であつた。そこで、夜を日について郷里に帰ろうとした。彼女はひどく声をあげて泣きながらついてきて、どうしても帰ろうとしない。彼女の蘇州での諸事を詳しく知れば知るほど、ちよつとやそつとの力で解決できそうなことではない。借金を取り立てようとする者は、彼女が遠くまで来たのを見て、ますます法外の要求をし、多くの者が口やかましく騒ぎ立てた。そのうえ、父上は帰つて来られたばかりであり、わたしも落第して意気阻喪しており、万難が一時に押し寄せたかのものであつた。船が如臯城外の樸巢まで来たところで、心を鬼にして彼女と別れ、彼女を蘇州に帰らせた。それというのも、借金取りたちを安心させて、後の事をはかろうと考えたからである。

【訳注】

○「不赴宝慶之調」。前出（第四段）。

○「龍潭、鑿江、燕子磯」。いずれも長江流域の地名。龍潭は、句容県の龍潭鎮。長江に臨んでいる。鑿江は儀徵。燕子磯は、南京の北東。断崖をなし、舟行の難所である。

○「余中副車」。副榜は補欠合格。「冒巢民先生年譜」崇禎十五年によれば、この年には百餘人も副榜があり、府尹の金公が「副榜の盛んなること、百年無き所たり」と述べたとあるが、結果的には落第と同じである。後文にははつきりと、下第とある。

○「樸巢」。如臯県城外にあった冒襄の別荘の名。嘉慶「如臯県志」卷一六、列伝一、冒襄伝に「邑有樸、踞城南濠。就樸架亭、与鵲鶴同棲。遂自号巢民(邑に樸有り、城南の濠に踞る。樸に就きて亭を架し、鵲鶴と同棲す。遂に自ら巢民と号す)」とある。「冒巢民先生年譜」によれば、この樸巢ができあがったのは、崇禎七年、冒襄二十四歳の時のことである。「樸巢文選」卷二に「樸巢記」がある。

(14) 陽月過潤州、謁房師鄭公。時間中劉大行自都門來、與陳大將軍及同盟劉刺史飲舟中。適奴子自姬處來云、姬歸不脫去時衣、此時尚方空在體。謂余不速往圖之、彼甘凍死。劉大行指余曰、辟疆夙稱風義。固如是負一女子耶。余云、黃衫押衙、非君虞仙客所能自爲。刺史舉杯奮袂曰、若以千金恣我出入、即於今日往。陳大將軍立貸數百金、大行以復數劬佐之。

十月に潤州(鎮江)に行つて、房師の鄭公にお目にかかった。その時、福建の劉大行が都からやつてきており、陳大將軍、盟友の劉刺史とで船の中で飲んだ。その時ちょうど彼女のところにつかわれていた下僕が帰つてきていうに

は、「彼女は蘇州に帰ってから、お別れした時の着物を脱がず、今でもまだうすぎぬを身につけています。そして、すぐに来て身の振りをつけてくれないならば、凍え死にするといっています」とのこと。劉大行はわたしを指さして「辟疆は前から情義に厚いことで聞こえていた。それがまさかこんなふうに一女子を裏切るとは」という。わたしが「黄衫や押衝（恋の仲立ちをする俠客）のようなことは、李君虞や王仙客（恋物語の男主人公）などにできることではありません」と答えると、劉刺史は杯を手に執り、うでまくりをして「もし千両の金が自分の思うままになるなら、今日すぐにでも行くのだが」という。陳大將軍はその場で数百両の金を貸してくれ、大行も人參數本で援助してくれた。

### 【訳注】

○「房師鄭公」。あるいは崇禎八年から十一年まで如臯県の知県をつとめた鄭騰雲のことか。嘉慶「如臯県志」卷二、官秩には、鄭騰雲、福建福清人、拳人とある。そして、「冒巢民先生年譜」によれば、この間、崇禎九年に「科試優等、秋応制金陵」、また十一年に「歳試優等」とある。自分の力を認めてくれた前任の知県をたずねたということか。

○「劉大行」。陳寅恪の「柳如是別伝」第四章（七〇一頁から）に、この劉大行についての考証がある。それによれば、この劉大行は、劉履丁、字を漁仲といい、福建の漳州の人。

○「陳大將軍」。張明弼の「亡姫董小宛伝」では「大帥」としかあらわれない。陳寅恪の「柳如是別伝」第四章（六九九頁）に、「影梅庵憶語」のこの部分を引いて、「寅恪案、同人集肆所録陳梁則梁与冒辟疆書、其中一札有「纜漁仲来、刻下試精神、作収棄兒文、兼試漁仲之參」等語、可与此參証」とある。「同人集」卷四にはたしかに「塩官 陳梁 則梁」の書を収めて、七十四通もの多きにのぼっている。しかしながら、光緒「海塩県志」卷一九、人物に陳梁の伝を収めるが、それは「隱逸」伝であり、書画などに秀で、広く文人たちとの交際のあつたことを記している。「大將軍」という呼称と合わないように思われるのである。

ここは疑問を存しておく。

○「方空」。うすぎぬ。『後漢書』章帝紀に「癸巳、詔齊相省冰納、方空穀、吹綸絮」とあり、李賢の注に「方空穀、紗薄如空也。或曰、空、孔也。即今方目紗也」とある。

○「黄衫・押衙、君虞・仙客」。黄衫・君虞は蔣防の「霍小玉伝」、押衙（古押衙）・仙客は薛調の「劉無双伝」の登場人物である（いずれも唐代伝奇）。黄衫、押衙は恋の仲立ちをする俠客。君虞・仙客は恋物語の男主人公である。なお、底本は「君平」に作っているが、「賜硯堂叢書」本に従って、「君虞」に改めた。「霍小玉伝」の主人公である唐代の詩人李益は、その字が君虞だからである。

○「覆」。朝鮮人參。朝鮮人參をあたえて援助をした、というのはそれだけ値段が高かったということであるが、これについても前掲陳寅恪の「柳如是別伝」第四章に考証がある。

(15) 詎謂刺史至吳門、不善調停、衆譁決裂、逸去吳江。余復還里、不及訊。姬孤身維谷、難以收拾。虞山宗伯聞之、親至半塘、納姬舟中、上至薦紳、下及市井、纖悉大小、三日爲之區畫立盡、索券盈尺。樓船張宴、與姬餞於虎嘯、旋買舟送至吾臯。至月之望、薄暮侍家君飲於拙存堂、忽傳姬抵河干。接宗伯書、媿媿灑灑、始悉其狀。且即馳書貴門生張祠部立爲落籍。吳門後有細瑣、則周儀部終之。而南中則李總憲舊爲禮垣者與力焉。越十月、願始畢、然往返葛藤、則萬斛心血所灌注而成也。

ところが思いがけないことに、劉刺史は蘇州に行ったものうまく調停をはかることができず、債権者たちがやか

ましくさわぎたてたので決裂してしまい、呉江に逃れ去ってしまった。わたしもまた故郷にもどり、たずねることもできなかつた。彼女はひとりぼっちで進退きわまつてしまい、どうにも手だてがなくなつてしまつたのであつた。虞山宗伯（錢謙益）がこれを聞いて、みづから半塘におもむき、彼女を船のなかに迎え入れ、上は紳士から下は市井の庶民にいたるまでの借金を、大きな金額のものも小さな金額のものも一つ一つ細かく気を使いながら、三日かけてすっかりかたづけしてくれ、一尺以上にもほる証文を取り返してくれたのである。それから樓船で宴席を張り、彼女を虎丘で餞別すると、ただちに船を雇つて、わが如臯に送り届けてくれたのである。十二月の十五日、夕暮れに父上のお相伴をして拙存堂で飲んでみると、いきなり彼女が川べりまで来てしていると知らせてきた。宗伯からの手紙を受け取ると、あれこれと書き記されてあり、はじめて事情がよくわかつた。宗伯は、ただちに門生の張祠部に手紙をやつてたちどころに彼女を落籍させ、その後の蘇州でのごたごたについては、周儀部にそれをかたづけさせてくれたのである。そして南京では、李総憲が、以前礼部の官であつたので、力を貸してくれたのであつた。十か月もかかつて、願いがようやつと実現したのであるが、行つたり来たり、ごたごたしたことは、万斛の心血を注いで成つたことである。

杜茶村曰、是篇娓娓至數千言、浩浩蕩蕩、西起崑崙、東注溟渤。冲瀾窈窕、異派分支、千態萬狀、姿媚橫生、頓使會眞長恨等篇、黯然失色。非辟疆莫能爲此文、非姬莫能當此作。眞千秋大觀矣。情語云乎哉。

杜茶村（澹）曰く、この文章は綿綿數千言にいたり、（黄河が）はるばると西は崑崙から東は海に注がんとするかのようである。やわらぎたおやかに、さまざまに枝分かれし、千態万狀、美しく艶やかな姿があふれ出ており、「会

真記」「長恨歌」などの作品をも、にわかには色あせさせるほどである。辟疆でなければこういう文章を書けないし、彼女でなければその作品に値しないであろう。まことに千秋の大観であつて、たんなる情語としてかたづけられようか。

【訳注】

○「如臯冒氏叢書」本の『影梅庵憶語』では、全体をいくつかのパートに分け、その末尾に「紀遊」「紀靜敏」などのように内容を要約している。冒頭からこの一段までが一区切りであつて、「紀遇」と題されている。

○「張祠部」。未詳。

○「周儀部」。「儀部」は礼部主事、礼部郎中の別名。陳寅恪の『柳如是別伝』第四章（七〇〇頁）に「寅恪案、同人集陸影梅庵悼亡題詠周呉昉士章『悼董宛君』七律八首之三末句云、『早知愁思心難掃、悔卻当年月下媒』頗疑周儀部即指此人。俟攷」とある。『同人集』には、周士章は石城の人とある。

○「李総憲」。総憲は都察院左都御史。この李総憲は、李邦華のこと。陳寅恪の『柳如是別伝』第四章（七〇六頁）では、錢謙益『牧齋有学集』卷三四「明都察院左都御史贈特進光祿大夫柱国太保吏部尚書諡忠文李公神道碑」を引用している。

○「杜于皇」。杜濬。字は于皇、号は茶村。黄岡の人。冒襄とは親交があり、「樸巢詩選序」「樸巢文選序」をはじめとする数多くの詩文が『同人集』に見える。『樸巢文選』（『如臯冒氏叢書』）にも「杜于皇曰」として杜濬の評語が付されている。

○この時の錢謙益が冒襄に与えた手紙（『與冒辟疆』）が、周亮工の『尺牘新鈔』錢謙益に見える。以下に原文と翻訳を示す。

武林舟次、得接眉宇、乃知果爲天下士、不虛所聞、非獨淮海維揚一俊人也。救荒一事、推而行之、豈非今日之富鄭公乎。闕

中雖能物色、不免五雲過眼。天將老其材而大用之。幸努力自愛、衰遲病發、田光先生所謂驚馬先之之日也。然每見騏驎、猶欲望影嘶風、知不滿高明一笑耳。雙成得脫塵網、仍是青鳥窗前物也。漁仲放手作古押衙、僕何敢叨天功。他時湯餅筵前、幸不以生客見拒、何如。嘉祝種種、敢不拜命。花露海錯、錯列優曇閣中、焚香酌酒、亦歲晚一段清福也。

杭州の船着き場でお目に掛かつて、あなたがほんとうに天下の士であることは、聞いていたとおりであつて、ただ淮海・揚州のすぐれものというばかりでないことがわかりました。救荒の一事は、これを推し及ぼせば、今日の富鄭公といえるのではないでしょう。試験場では人材を物色することができるとはいつても、五色の雲が眼の前を通り過ぎてゆくことがないわけではありません。天はあなたの才能を老成させ、大きく用いるつもりなのでしょう。どうぞ、努力してご自愛のほどを。わたしは老い衰えて、病にかかり、田光先生のいう「馱馬もこれを抜いて行く」というやつですが、それでも駿馬を見るたび毎にその影を望んで風にいななごうとは思っています。あなたにも値しないでしょうが。双成が苦界から身を脱したのは、やはり青い鳥の窓の前の物というべきで、漁仲が思い切つて古押衙になつてくれたからであつて、わたしはどうして天の功をずうずうしく自分の功にすることができましようか。いずれ、湯餅の宴会の折には、どうかよく知らない客だということで門前払いにしないでください、いかが。すばらしい贈り物をいろいろいただきました、どうして頂戴しないわけにまいりましようか。花露の酒に海の物をさまざま優曇閣の中にならべ、香を焚き酒を酌むのも、また歳晚の一段の清福であります。

○この手紙は、錢謙益が手紙とともに董小宛を送り届けて来たのに対し、冒襄が酒とさかなを贈つて、そのお礼をしたのに対する礼状であろう。錢謙益の最初の手紙は、おそらくもとと「同人集」に収められていたと思われる。が、現存する「同人集」の諸テキストには、錢謙益の手紙を収めるものはない。ただ尺牘を収めた巻四の目録で、王思任と錢士升の間が空白になっている。あるいはここにもと錢謙益の尺牘が収められていたのではないだろうか。

○「武林」。杭州。冒襄は、父の任地に母を迎えに行った際、行き帰り杭州を通っている。葛萬里「清錢牧齋先生謙益年譜」によれば、崇禎十三年には「既度歳与（河東君）為西湖之遊」とある。

○「救荒一事」。『冒巢民先生年譜』崇禎十三年に「歳大飢」とあり、冒襄が救荒を行なったことを記している。

○「富鄭公」。宋の富弼のこと。『宋史』卷三一三本伝によれば、この人はやはり救荒を行なったことで知られる。

○「天将老其材而大用之」。この表現は、『孟子』告子下の「天将降大任於是人也」云々を下敷きにしているようである。もちろんそういつて科挙に落第した冒襄を慰めているのである。

○「田光先生所謂鷲馬先之」。『史記』刺客列伝に「田光曰、臣聞騏驎盛壯之時、一日而馳千里、至其衰老、鷲馬先之」とある。

○「青鳥窗前物」。『神仙伝』卷六「東陵聖母」に見える。東陵聖母の廟には青鳥がおり、失せ物の所在を知らせてくれる。一度いなくなった董小宛が再び戻ったことを指す。

○「漁仲」。前掲劉履丁のこと。

○「湯餅筵」。子どもが生まれて三日目の祝い。董小宛と冒襄の間に子どもが生まれることを予祝したのである。

○「花露海錯」。冒襄は、花露の酒と海産物を贈った。酒と肴であるが、それに対して錢謙益は、これは歳末の一段の清福だ、という感謝の意をあらわしたのである。

（待統）